

# 耕種農家と畜産農家を結ぶ「たい肥施用コーディネーター」

農業技術協会技術主幹

大塚 紘雄

農業技術協会では、平成13年度からたい肥施用コーディネーター養成研修が行われてきました。この研修の目的は、たい肥施用コーディネーターを育成することです。たい肥施用コーディネーターは、耕畜連携を強化し、循環型社会を中心とした持続的農業を実現するために、たい肥の特性を的確に把握して、適切な施用ができるように、たい肥の知識・技術を有する専門家で、たい肥利用の指導者です。耕種農家と畜産農家を結ぶ接着剤としての役割が求められておりこれが「たい肥施用コーディネーター」です。その役割は耕畜連携の切り札ともいわれ、ますますその役割は重要になってきています。

たい肥施用コーディネーター養成研修は平成16年度からは、本研修の第2期目として、若干、衣を代えて新しく出発した所もありますので、ご紹介したいと思います。

## 研修体系と実施スケジュール

研修の企画・実施計画は、実行委員会で決められ、委員長は熊澤喜久雄東京大学名誉教授、副委員長は長野間宏(独)中央農業総合研究センター土壌肥料部長で、9名の実行委員から構成されています。

研修は、(1)基礎研修、(2)地域集合研修、(3)レポート作成提出、(4)修了式(意見交流検討会と修了証書授与式)の4つからなっています。

基礎研修は5日間、つくば市の農林団地内の農林交流センターで行われます。基礎研修は第1回、第2回と、同じ講義がそれぞれ行われ、10月初旬の週と10月終わりの週に行われています。平成16年度は第1回10月4日(月)～8日(金)、第2回10月25日(月)～29日(金)、平成17年度は第1回10月3日(月)～7日(金)、第2回10月24日(月)～29日(金)に行われました。講義はたい肥コーディネーターとして必要な知識と実習の修得と先進優良事例圃場見学(平成16年度は日本農業研究所実験農場見学、平成17年度は「農業法人みずほ」のたい肥製造現場と農産物生産・販売現場見学)が行われました。

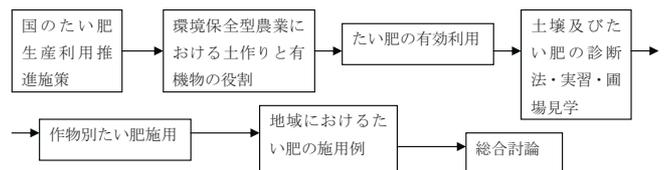


図1. 講義の流れ

基礎研修では講義が一通り終わった後に、「研修の成果をたい肥利用にどう生かすか」の課題で総合討論が行われます。総合討論は、3つのポイントに絞って行われます。すなわち、(a)研修の講義が十分理解されたか、(b)受講者の各地域で家畜廃せつ物のたい肥利用に障害になっているものは何か、(c)その他研修を受けて得られた感想など、受講者の発言を引き出す立場で行われています。受講者と講師の先生方との論議が毎回活発に行われており、盛会のうちに時間が過ぎてしまいます。

毎回の講義では、講師の先生が使われるパワーポイントを講師の先生の許可を得て、コピーを差し上げることにしています。これが受講者の方々には評判がよいようです。一つ一つの講義はぎっしりと研究成果が詰まっており、とても時間内に理解するのは受講者にとっては大変で、ここで役に立つのが講義の時に使われたパワーポイントです。講義を助けるものとしてパワーポイントは重要な復習テキスト補助となっています。このことから、CD-Rにパワーポイントのコピーを作成提供してできるだけ便宜をはかることを心がけています。ただし、著作権や特許などとの関係が出てきますので、外に向かって使う場合には原著作者に了解を頂くようお願いしています。

地域集合研修は平成16年度から始めた特徴のある研修です。地域農業の主作目において優良たい肥の有効利用や良好な耕畜連携の現場事例を見学しながら、地域における課題を修得することを目的としています。

平成16年度は兵庫県加古川市において、平成16年11月17日(水)～11月19日(金)、水田作における耕畜連携の事例を中心とした研修を行いました。この研修では、①地元の兵庫県農業技術研究センターの研究者による、水田に対する研究の紹介、②現地の水田における耕畜連携の優良事例の講義と見学、③「水田作農家と

畜産農家の連携とたい肥有効利用をどう進めるか」の総合討論を行いました。研修のカリキュラム等については、農業技術協会のホームページ<http://www.nou-gi.or.jp/curri.html>をご覧ください。

現地見学はあいにくの雨で圃場の土の状態を見ることはできませんでした。しかし、現場の指導に直接当たっている耕種側の加古川市集落営農組織連絡協議会会長・横山氏と畜産側の花房牧場主・花房氏から話を聞くことができ、参加者との質疑応答が行われました。高畑地区は約40haで、米、小麦、ダイズ、2年3作で、籾殻中熟たい肥を3t/10a施用と深耕していること、さらに、籾（コシヒカリ）の自然乾燥（ライスセンター加熱なし）することによって、ブランド米「鹿児の華米」を作っていること、また、12月10日頃マニュアルスプレッダーで3～4ha/1日散布する等の他、多数の情報を得ることができました。

この総合討論でも活発な討議がなされました。討論の内容は今年の農業技術60巻9号ページ422～427にその様子を書いてありますので、お読み下さい。平成17年度は、熊本市で平成17年11月16日（水）～18日（金）、チサンホテルで行いました。ここでの地域研修は広域耕畜連携がテーマです。講義は九州農業沖縄農業研究センターの樽本講師、山本講師と熊本県農業研究センターの郡司掛講師、鹿児島県農業試験場の松元講師、さらに、広域耕畜連携について現場の取り組みについてJA菊池の越猪畜産企画課長にお願いしました。

JA菊池は耕畜連携を活発に行っており、耕種農家側のJA阿蘇、JA上益城、JA熊本さらにJA八代（旧JA鏡）との連携が行われています。特に、有機物資源の需給推進で、基本協定を畜産のJA菊池とイグサ産地のJA鏡（現在はJA八代）とがいち早く結び、約70kmの距離をもつ、広域流通について学習することが、今回の研修の一つでした。近年、流通量も増加していると言われており大変興味のあるところです。たい肥施用コーディネーターを通して広域流通も普及されることを期待しています。

## 耕種農家の土作りは循環型農業のポイント

ここで重要な点はJA鏡がイグサの品質向上にはたい肥を利用した土作りが重要であると考えたことです。この研修では、たい肥をどのように利用して、生

産を上げると同時に、環境と調和して土を作っていくかを考える研修でもあります。そこで、畜産農家には良いたい肥づくりが求められる一方、耕種農家には正しいたい肥の利用の仕方が求められます。ここではたい肥を使って、どのようにして良い土を作るかです。耕種農家の土作りによって、たい肥の利用消費も変わってきます。ここで、たい肥施用コーディネーターの出番です。耕種農家の土作りにはたい肥施用コーディネーターの役割が大変期待されています。循環型農業の成功のポイントになります。耕種関係者だけでなく畜産関係者のかたがたにもたい肥コーディネーター養成研修をうけて頂き、コーディネーターとして活躍を期待しているところであります。

## 修了式

基礎研修を受けて、研修レポートを「地域における家畜排せつ物等のたい肥利用推進のための問題点とその解決方策」の課題で書いて、提出して頂ければ、修了証書の授与式が待っています。修了式に当たっては、先の提出いただいた研修レポートの中から優良レポートを選び、選ばれた人には修了式で発表をお願いしてあります。平成17年度は8名の予定です。優良レポートの発表の次は、研修レポートの課題で総合討論会を行います。最後に、会長から証書が修了者に手渡されます。このようにして、たい肥施用コーディネーターが誕生します。

前にも述べました様に、たい肥施用コーディネーターは家畜糞尿たい肥利用と土作りにとって重要な位置を占めています。耕畜連携の接着役として大いなる活躍が期待されているところです。

## 参考文献

- 農業技術協会編：平成17年度たい肥施用コーディネーター研修基礎研修・地域集合研修講義・実習テキスト（1）～（4）、地域集合研修、（2005）  
 大塚紘雄：平成16年度たい肥施用コーディネーター養成研修地域集合総合討論検討会のメモより、「水田農家と畜産農家の連携とたい肥の有効利用をどう進めるか」、農業技術、60（9）、422-427（2005）  
 大塚紘雄：新しい肥コーディネーター養成研修、農業技術、60（5）、224-228（2005）